

1年2組

 みんなが集まるあさがおハウスづくり
 ～ハウス作りを通して「ひと」を感じる～


「こんなの夢みたいだ！」

夏休み前、ダンボールを使って、あさがおハウスの模型作りを行いました。しかし、ダンボールは強度が弱く、模型は簡単につぶれてしまいました。それを見たMさんが、「やっぱり木で作らなきゃだめだね」と言ったことを受けて、木を使ったあさがおハウスづくりに取り組むことにしました。まずはあさがおハウスについて、それぞれの思いを語り合いました。

教師：夏休み前にみんなで作ろうと決めたあさがおハウスだけど、どうしてあさがおハウスを作りたいのか教えてくれる？

Mさん：みんなが楽しく遊べるようにしたい。

Kさん：みんなで遊んでもっと仲良くなりたい。

Aさん：できたら、1年1組さんのトンネルと組み合わせて、トンネルから入れるようにしたい。

Hさん：あさがおハウスは1組も2組も遊べる場所にしたい。

子どもたちのあさがおハウスへの願いは、「くらしの場を広げたい」、「クラスの垣根を越えて仲を深めたい」ということのようにでした。どの発言にも子どもたちは強くうなずき、共感している姿があり、みんなが共通の目的をもっていきました。そして、どんな家にするかの話し合いでは、プロの人に設計図を見せたいというNさんの提案に多くの子どもたちが頷いていました。

子どもたちの思いを語り合った次の時間。子どもたちは材料となる木を集めたいと言い、自然体験園にある木くず置き場から、使えそうな木を集めてきました。集め始めてからしばらくして、Hさんが、「こんな木使えない」と言いました。私が、「どうして使えないの」と尋ねると、「だってボロボロだし、数も足りない」と答えます。するとSさんが、「どうして2年2組の小屋の木はあんなにきれいなんだろう」と言いました。2年2組にはヤギの小屋が建っています。その木材がとてもきれいなことに気づいたのです。そこで、2年2組さんをお願いをして、小屋を見学させてもらうことにしました。近くで見ると、自分たちが集めた木とは明らかに違うことや、まだ木材が余っていることも分かりました。すると、Sさんが、「この木どうしたの」と2年生に尋ねました。「どこからもらってきたのだろう」、「私たちもこの木材が欲しい」という問いや願いがSさんを動かしたのでしょうか。

2年生は、「木商さんからもらったんだよ。これは全部いらない木なんだよ」と優しく教えてくれました。

みんなが教室に帰ってくると、Sさんは、「木商さんがいらない木をくれるんだって」と伝えました。続けてAさんが「電話して聞いてみよう」と言いました。そして、木商さんから木を譲っていただくことになりました。

次の時間、木商さんが木材を運んでくださいました。子どもたちはトラックが見えた途端、赤白帽子を被り、軍手を付けて外に出ていき、みんなで木材を下ろしていきました。重い角材や長い角材があり、運ぶのは簡単ではありませんでした。しかし、子どもた



ちは手を休めず、黙々と木を下ろしていました。Oさんは、山のように積みあがった木材を見て、「こんなの夢みたいだ!」とつぶやいていました。その言葉からは、これからの活動に期待が高まっている気持ちが伝わってきました。

そして、8月30日には木瓜建築の伊藤一生さんに来ていただき、あさがおハウスプロジェクトに参加していただきました。伊藤さんからは、「家を建てるときには、まず柱を立てる」ということを教えていただきました。それを聞いたGさんは、「やっぱりね」と言いました。ダンボールで模型を作った時に、壁が倒れないようにするには柱が必要だということを知っていた子どもたち。この、「やっぱりね」は、家作りをとことん追究したからこそ出てきた言葉だと感じました。そして、いよいよ柱を立てていきます。一生さんに何をしたらいいのか聞きながら、作業を行っていきます。砂利を拾う、柱を埋めるための穴を掘る、水を汲んで地面を柔らかくする、穴に入れるための土を集める…といったように、子どもたちは、それぞれの場所で、それぞれの作業を行いました。やること、やる場所が違って、柱を立てるという目的のために活動している姿。それぞれの活動をしていても、どこかで子どもたち同士が繋がっているように見えました。

夏休み前のあさがおハウスプロジェクトでは、「もの」や「こと」に思いを寄せて、対象に働きかけ、対象から働き返されながら学びを深めていきました。そして、夏休み明けには、「ひと」と出会うことで、見通しをもち、自ら動き出す子どもたちの姿がありました。授業の枠を超えて、休み時間にも作業をしている子どもたちもいます。あさがおハウスを作ることが、子どもたちのくらしの一部になり始めました。



頑丈なハウスにするために

その後、教育実習生の力もお借りしながら、1つ目の目標である6本の柱を立てることができました。Tさんは6本の柱を見て、「これなら1組さんも入れるね」と、にこにこしながらつぶやいていました。あさがおハウスプロジェクトの願いの1つである、「クラスの垣根を越えて仲を深めたい」という目標が現実的になってきて、子どもたちの活動にもより一層力が入ってきています。そんな中、Nさんが柱を触りながら、「この柱グラグラする」とつぶやきました。柱は、一生さんに教えてもらった、穴を掘り、砂利を入れて底を平らにし、柱の周りに土を入れて押し固める方法で立てました。しかし、それだけでは、子どもたちの力で簡単に揺れてしまうのです。Nさんは柱が揺れることを知り、「柱と柱の間に木をつけて頑丈にしなきゃ」と言いました。

次の時間のあさがおハウスプロジェクトは、実習生の先生が授業をしてくれました。前時にSさんたちが追究した柱の揺れ。クラスの子も、「このままだと柱が倒れちゃう」「この柱に床をつけたら床もぐらぐらするんじゃない」と、事の重大さを知り、どうしたら柱の揺れが収まるのだろうかという問題意識が芽生えていました。その後行った調べ学習では、Dさんは、「柱を頑丈にする方法」というキーワードを何度も検索していく中で、「筋交い」という言葉にたどり着きました。実習生の先生が、「筋交いという言葉が出てきたみたいだけど、筋交いって何だろうね」と問いかけると、Dさんは、iPadで検索し、「柱に斜めにつけるんだ」とつぶやいていました。Sさんは、柱の間に4本の間柱を立て、そこに横材をつけるという壁



の骨組みに目を付け、「こうすれば柱が頑丈になるはずだ」とみんなの前で声を大にして語っていました。(以降、この組み方を子どもがつけた名前から「柱ばさみ」と呼びます。)

さらに次の時間、教師は、「筋交い」と「柱ばさみ」の2つの方法で作った模型を提示しました。模型を実際に揺らしてみると、どちらの方法でも柱はほとんど揺れません。それを見たSさんは、「どちらもやってみないと本当に頑丈になるか分からないよね」とクラスに伝え、どちらの方法も試してみることになりました。「柱ばさみ」を作る際、Sさんが「薄い柱が4つ必要だ」ということを、友だちに伝えると、子どもたちは薄い板を持ってきました。Dさんは持ってきた木材を見て、「これじゃ長いな。半分に切ろう」と言いました。しかし、ちょうど半分の場所がどこなのか、見当が付きません。Sさんは、「定規持ってくる」と言い、教師用の1mものさしを持ってきて、Dさんと一緒に活動を始めました。

Dさん：「これ、大体400cm」

Sさん：「じゃあ、半分の場所は200cmか」

Dさん・Sさん：木材の左端から200cmの位置に、木の棒で目印をおく。

Dさん：「一応反対側からも長さ測ろう」

Dさん・Sさん：木材の右端から200cmの位置に、木の棒で目印をおく。

Dさん：「あれ？全然場所が違う」

Aさん：「えー。どうする」

Sさん：「あっち（左端）からここ（目印）までと、あっち（右端）からここ（目印）までは両方200cmだから、その（隙間の）真ん中が（木材の）真ん中じゃない」

Dさん：「（隙間が）20cmだから、ここだ」と言い、ものさしの10cmの目盛りを指さす。

ものさしの使い方を学習していない子どもたちが、ものさしで長さを測り、長い木材の中心を求めていきました。くらしの中で学ぶ子どもたちの姿は、生き生きと輝いていました。「あさがおハウスをよりよくしたい」という願いが、子どもたちの学びの原動力となり、自ら探究し、問題を解決していく子どもたち。これから先のあさがおハウスプロジェクトでは、どのような学びがあるのか、私自身もワクワクしてたまりませんでした。



みんなが上れる階段にしたい

現在2階建てになっているあさがおハウスですが、2階に上るための手段がありません。作業をするときは、脚立で2階に上っていましたが、来てくれた人たちが2階に上れるようにするために、階段をつけることになりました。するとAさんが、「ちょっと相談があるんだけど、1段の高さは、何cmにすればいいの？」とみんなに問いかけました。それを聞いた子どもたちは、「確かに」と頭を悩ませました。そこで、高さ30cmのビールケースを逆さまにし、階段のように積み重ねて上ったり下ったりしてみました。子どもたちは、「落ちそうで怖い」、「下りるのが怖かった」、「足を上げなきゃいけないから、上るのが大変」と、素直な気持ちをつぶやいていました。この経験から、階段の1段の高さは30cmより低くした方がいいことが分かってきました。さらにMさんは、「階段は、全校のみんなが楽に、安全に上れる高さにしたらいんじゃない」と、みんなに伝えていました。子どもたちの問いが、「1段の高さは何cmにすればいいの？」から、「みんなが楽に、安全に上れる高さとは何cmなのか」という問いに更新されていきました。再び高さについて意見を交わし合う子どもたち。しかし、「楽に、安全に上れる高さ」の最適解は、なかなか決まりませんでした。するとAさんが、「学校の階段って上りやすいじゃん？だから、学校の階段の高さにしたらどうかな」と提



案しました。それを聞いたNさんが、「それいい。じゃあメジャー持って測りに行こう」と言うと、周りの子どもたちも足早に階段へと向かっていきました。まずは教室棟の階段の高さを測りました。目線を階段の高さに合わせて測ってみると、16 cmであることが分かりました。しかし、子どもたちはこれだけでは満足せず、学校にある様々な階段の1段の高さを測り、上り下りして感覚を確かめていました。その結果、学校には3種類（14 cm、16 cm、17 cm）の高さの階段があることが分かりました。Aさんは、「楽に上れたし、小さい子でも上れるから」という理由で、

あさがおハウスの階段は、14 cmがいいと伝えてくれました。しかし、17 cmを選んだSさんが、「14 cmだと階段の数が多くなるんじゃない?」と言ったことで、子どもたちは、それぞれの階段に必要な段数に目を向けていきました。あさがおハウスの高さは210 cmであるため、14 cmにすると15段、16 cmにすると13段、17 cmにすると12段の階段になることを、割り算を用いて求めました。その事実を知った子どもたちは、再び階段へ向かいました。そして、教室に帰ってきた子どもたちは口々に、「12段（17 cm）が一番楽だ」とつぶやいていました。Oさんは、「14 cmは、1段ずつ上るのは楽だけど、15段上るのは大変だった」と教えてくれました。Sさんは、「17 cmは1年生でも上れるし、6年生は足が長いから、1段が大きい方がいい」とみんなに語っていました。そうして、あさがおハウスにつける階段の高さは、1段17 cmにすることが決まりました。

Aさんの「1段の高さは何cmにしたらいいの?」という問いかけから始まった、階段1段の高さの追究。私は、Aさんの、「小さい子でも上れるから」という言葉や、Sさんの、「6年生は足が長いから」という言葉から、彼らにとってのあさがおハウスづくりの目的は、「私たちのため」だけでなく、「あさがおハウスに遊びに来てくれる人のため」になってきていると感じています。まだはっきりと見えてはいないけれど、いつか遊びに来てくれる誰かに思いを寄せているのだと感じます。



「これでようやくあさがおハウスだね」



10月に、大事に育てた朝顔さんで作った朝顔リース。「クリスマスパーティーであさがおハウスに飾りたい」という願いをもって、リースに飾り付けを行ってきました。そしていよいよ、そのリースをあさがおハウスに飾る時が来ました。一人ひとり、自分がつくったリースを大事にあさがおハウスへと運び込みます。Mさんは、自分で作った朝顔リースを両手で持ち、あさがおハウスの壁につけると、微笑みながらしばらく自分の朝顔リースを眺めていました。そして、「朝顔リースを飾ったから、これでようやくあさがおハウスだね」とつぶやきました。Mさんにとってのあさがおハウスの完成は、この瞬間だったのかもしれませんが。

朝顔さんの命が、あさがおハウスの中に入ることで、あさがおハウスにも命が吹き込まれたように感じたのでしょう。朝顔さんの幸せ、あさがおハウスの幸せ、Mさんの幸せ。それらすべてが詰まった微笑みだったように感じます。